



「笹川杯作文コンクール 2010」～日本語で応募～ 二等賞作品

※日本語の原文を尊重し、一切手を加えておりません。

「私が関心を持つ日本事情—鉛筆からの感想」

大連大学 王貞



日常の感想は日記、未来への幻想は小説、遠方の友達には手紙。わたしにとって、文章を書くのは日常茶飯事のことだ。どんな短い文でも、書くと心の穏やかさを取り戻すことができる。

わたしは、白い紙に、人の手できれいに書かれた薄い文字が、一番美しい文字だと思う。お茶やコーヒーを飲みながら、昔書いた文章を読んで、その時の事や、心境、一緒に過ごした人を思い出して、ゆっくりと味わいながら、今の自分を反省する。そういう時間は、長い人生で一つの幸せではないだろうか。

そしていつの間にか、鉛筆が一番好きなものになった。書き直しやすく、色が薄くてきれいだし、書くときにペン先と紙が摩擦するあの特別な「サクサク」という音も非常にすてきだと感じている。鉛筆削りで鉛筆を削りながら、次の文章を考えるのも、一つのくせになってきた。

しかし、一つの問題が生じた。鉛筆だ。国産の鉛筆はどうも使いたくないのだ。なぜかというと、質が良いものは、デザインが悪い。中国でもっとも有名なある鉛筆メーカーを例にすると、その鉛筆は、書きやすくて質が良い。しかし、伝統的な六角形に、深緑がぬられている。たしかにまじめな印象を与えるが、まじめすぎで、趣がないと、わたしに嫌われた。

それに対し、かっこうのよい鉛筆のほとんどは質が悪い。芯の色が不均等で、書きにくいし、よく紙や手が汚れてしまう。あるいは、芯がとても脆くて、数回落としただけで使えなくなることもよくある。

完璧主義のわたしは、こんなことが許せないのだから、長い間、ずっとシャープペンシルで我慢しながら、あちこちいい鉛筆を探していた。

母に怒られるほどたくさんの鉛筆を買った後、ようやく今使っているのを手に入れた。

日本製の鉛筆だ。握りやすい三角形に、鮮やかな色がぬられている。目立つデザインはないが、簡潔でかえって気品がある。芯も丈夫で、何度落としても大丈夫だ。普通の鉛筆の二倍の価格で販売されているが、とてもお買い得と考えている。

初めてこの鉛筆を使った時の喜びを、今でも覚えている。

それから、日本製の文具に好感を持つようになった。ある日、文具店である日本製の消しゴムを見つけた。デザインがとてもおもしろい消しゴムだった。店員に値段を聞くと、10元だと言うのだ。中国の普通の消しゴムはたった1元ほどなので、これは本当にたかすぎる。二週間悩んでいたが、日本製の鉛筆で書いた文字は、やはり日本製の消しゴムで直したほうがいいと思い、ついに、「買おう！」と決めた。

もともとデザインが気に入って買ったのだが、使ったら、意外に消しやすいのだ。そのため、うれしくてたまらなかった。

それから、日本製品に惚れてしまって、文房具だけでなく、日本製品についての事情にも関心を持つようになった。

日本製品は世界中で愛されている。日本製品といえば、ハイテクノロジー、ユニバーサルデザイン、高いコストパフォーマンスなどのイメージがある。上海万博でも、日本館は「心の和、技の和」をテーマとして、各国の観光客の目を引いている。日本製品は先端技術が使われているだけでなく、人の心を温める力も持っている。欧米のハイテク製品は、冷たいと感じる。それに対し、日本のハイテク製品にはやさしい感じがある。それはなぜかということ、やはり細かいことに着目しているからだ。

日本人は製品をデザインするとき、使う人の立場に立っている。それはわたしが最も感心を持っているところだ。技術は、人によりよい生活を与えることにこそ意味がある。そのため日本製品はユニバーサルと言われる。

鉛筆やロボットなど、日本製品の相手のための考え方に感銘する。そして、いつか中国製の製品も日本製品のように、細かいことにも着目し、細部まで心をこめて作ってほしいと思う。